

## ヨハネによる福音書 1章 1～18節 (2)

### — 「宿られた」「栄光」(14) を中心にして —

前回の4月より、ヨハネ福音書の冒頭に戻り、福音書を初めから順に読み始めました。今月は引き続き、前回と同じ箇所から学びを続けたいと思います。1章1～18節の第2回目となります。

今月は特に、14節に記されている2つの表現を中心に学ぶことにしましょう。

14節は次のように語ります。

「<sup>ことば</sup>言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。

それは父の<sup>ひと</sup>独り子としての<sup>こ</sup>栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」(14)

- ・「言は肉となって・・・」とは 前回 焦点を当てて学んだ一節で、独り子なる神 イエス・キリストが人となって・・・ということでした。前回の「基本の学び」をいま一度振り返ってみてください。
- ・問題は、そのようにして人となられたイエス・キリストが「わたしたちの間に宿られた」ということです。それが次に問題になるところで、今月は一つには、その点に的を絞って考えたいと思います。
- ・加えて、「わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって・・・」と14節は続きます。ならば、その「栄光」とはいったい、どんなものなのか。それがあと一つ、問題となるところではないでしょうか。
- ・終わりにある「恵みと真理」については別途 後で触れることにして、今月はまずもって これら2つの点に目を凝らしたいと思います。そこにこそ、前回の「言は肉となって」に続く、ヨハネ福音書冒頭のもう一つのエッセンスがあるように思われます。

### 「宿られた」(14)

- ・第一は「宿られた」という表現です。それははたして、どういうことなのでしょう。それを読み解くため、福音書が書かれた原語のギリシア語を見てみると、"<sup>エスケーノーセン</sup>ἐσκήνωσεν<<sup>スケーノオー</sup>σκηνώ"という言葉がそこで使われています。そのそもそもの意味は「テントを張る」ことで、聖書的な言い回しをするなら、「<sup>てんまく</sup>天幕を張る」とか「<sup>まくや</sup>幕屋に住む」とかいうふうになります。
- ・では、だとしたら、イエス・キリストが私たちの間に「天幕を張られた」とはいったい、どういうことなのか。イエス・キリストが私たちの間で「幕屋に住まわれた」とはいったい、どういうことなのでしょう。このいかにも分かりにくくて厄介な表現を前にし、例えば 次のような解釈がなされています。しばしば見受けられるものを2つ 御紹介しましょう。

① 福音書記者は慎重に、永遠のロゴス（すなわち イエス）が宿るということを言う。ロゴスにとって 地上の生は短い挿話にすぎず、過渡的な状態にすぎないのである。家と違って、天幕は一時

的にしか住まないものなのだから・・・。人と成り 地上に生きたということがいかに重要であるにしても、ロゴスの地上以前・以後の存在と比べれば、地上の時は間奏曲にすぎない。

② 天幕とは、この世に根を下ろした固定した家ではなく、いつでも、どこにでも移動可能な仮りの宿です。・・・イエスはこの世の組織や制度、文明の進歩、そのようなことには関心を持たれなかったのです。イエスは、この世から自由にされた、一個の放浪の巡回伝道者でした。・・・イエスは、この世を旅人、宿り人として自由に生きた人でした。「天幕を張る」とは、そういうことを意味しているのではないのでしょうか。

・ですが、こうした理解からはやはり、この世の日々をどこか軽く見る印象が拭えないのではないのでしょうか。どこか 付け足しのおまけのような印象です。イエスにとって、この世の生活というのははたして、その程度のものだったのでしょうか。

・こうした見方に対し、重要なヒントになる描写が旧約聖書にあります。

① 例えば、出エジプト記 33 章 7 節を見てみると、次のように記されています。「モーセは一つの天幕を取って、宿営の外の、宿営から遠く離れた所に張り、それを臨在の幕屋と名付けた。主に伺いを立てる者はだれでも、宿営の外にある臨在の幕屋に行くのであった」

② しかも、そのように臨在の幕屋が建てられ、礼拝の準備が整ったとき、そこで一つの出来事が起ります。同じく出エジプト記の 40 章 34～35 節によれば、「雲は臨在の幕屋を覆い、主の栄光が幕屋に満ちた。モーセは臨在の幕屋に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、主の栄光が幕屋に満ちていたからである」と述べられています。こうした出来事が一度ならず続きます。

・要するに、ユダヤ人にとって テントとは、その最も重要な意味において、旧約聖書が語る特別な幕屋を意味したということです。幕屋の中の幕屋である「臨在の幕屋」がそれで、祖先がかつて 奴隷のエジプトを脱出し、荒れ野を放浪したとき、そこで神と見え、神に礼拝を捧げた場所です。神がその場に臨まれ、人々とお会いくださる特別な幕屋でした。そして、そこに主の栄光が満ちたというのです。

・つまり、イエス・キリストが私たちの間に宿られたとは すなわち、イエス・キリストがそのようなテント（臨在の幕屋）を私たちの間に張られたということではないのでしょうか。私たちの間で、そのような幕屋に住まわれたということではないのでしょうか。

・だとしたなら、それは より具体的に言うと、イエス・キリストが地上でどんな生を生き、そこにいったい 何が現わされたということなのでしょう。

・そして、そのようなイエス・キリストを この私たちはどのように受け止め、そこに 各人へのどんなメッセージを読み取るのでしょうか。

## 「栄光」(14)

・ヨハネの福音書はこのように、イエス・キリストが私たちの間に天幕を張られ、その幕屋に住まわれたと告げます。そして、そのとき、そこに主の栄光が満ちたと言うのです。

・そこで、次に問題になるのが「栄光」ということです。「主の栄光」(前記 出エジプト記) と言い、

「その栄光」(前記 ヨハネ福音書) と言い、「父の独り子としての栄光」(同) と言う その栄光とはいったい、どんなものなのでしょう。実際、「栄光」というのは、ヨハネ福音書が好んで用いる表現でもあります。

・ところが、福音書を読み進めていくと、そんなヨハネにもかかわらず、あの有名な栄光の場面が取められていないことに気づかされます。いわゆる「山上の変容」と呼ばれる、いかにも栄光という出来事を彷彿させる場面です。「ルカによる福音書」から引用すると、次のように記されています。「イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。ペトロと仲間は、ひどく眠かったが、じっとこらえていると、栄光に輝くイエスと、そばに立っている二人の人が見えた。その二人が・・・」(ルカ 9:28~36)

その理由としては 大まかに言って、①事を知っていて(上記の引用によれば、山上に伴った 3 人の中に 弟子のヨハネの名が見られます) そのうででお 意図して落としたか、もしくは ②ヨハネ福音書をまとめた者(たち) がそもそも 山上の出来事について知らなかったか、のいずれかと考えられます。

が いずれにせよ、いわゆる栄光の代表格とも言える「山上の変容」の場面がヨハネ福音書にはないということ、そのことだけは確かです。

・しかも そればかりか、ヨハネの福音書にはそもそも、その類いの劇的で華やかな描写が見当たりません。それははたして、なぜなのでしょう。実は、そのような特質の中にこそ、ヨハネが何より伝えたかったメッセージが隠されているようにも思われます。

・ヨハネの福音書は「栄光」というものをどのように捉えたのでしょうか? イエス・キリストの生涯のどこに、それを見て取ったのでしょうか。イエスの生き様に目を凝らし、その思いを深く感じ取れたらと思います。

[参照] 「イエスはこうお答えになった。『人の子が栄光を受ける時が来た。はっきりしておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ』」(ヨハネ 12:23~24)

・そして、私たちはどのようなあり方の内にそれを見、どのようなあり様でもってそれを生きるのでしょうか。

### **「律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れた」**

(17)

・終わりに、14 節と重なる部分のある 17 節について一言 触れておきましょう。  
 ・「律法」とは十戒に代表される戒めのことで、厳密には それらを記した旧約聖書の初めの 5 書(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記) を指しています。モーセの書とされる 5 書で、ヨハネ福音書が「律法はモーセを通して与えられた」と語るのはこのためです。

・しかし、ヨハネはその律法について、「が(しかし)・・・」と言います。がしかし、そのような律法によっては 私たちはもはや救われない、と。私たちを真実救ってくれるのは 恵みを下さるイエス・キリストそのお方であり、そのイエスの示してくださった全き真理であると、そう語ります。

なぜならば、「律法」とはここで、それをなし遂げる「人間の行為」や「自分の力」を象徴しているからです。つまり、自分の力や立派さでは <sup>みずか</sup>自らを救いえない。恵みによってしか、人は救われないと、ヨハネはそう指摘するのです。

「恵みと真理はイエス・キリストを通して現れた」とは、そういう意味です。

・「恵み」とは、受けるに値しない、受ける資格のない者に与えられるものです。そして、それはキリスト教信仰を表わす中心的な言葉の一つともなっています。ヨハネはその言葉を、冒頭だけで 4度も繰り返します。

・私たちの人間理解や自己理解に、そしてまた信仰の理解に、それはどんな語りかけを響かせるでしょうか。